

無名草子の物語評 (一)

伴 利 昭

無名草子の物語評論について、物語論としての考察を前稿にこころみたが、これに関連して狂言綺語觀との関わりをとりあげ、その補としておきたい。

無名草子の構成は、まず序文で場所と登場人物を設定し、「捨てがたきふしある」もの、物語、歌集、実在の女性について評論する形をとっている。このなかで物語の評論が大部分を占め、また物語のうちでは源氏物語評がその中心をなしている。源氏物語を論じるにあたっては、卷々の論、登場人物論、ふしぶしの論(場面論)と大きく三つの柱をたて、「あはれなること」、「いみじきこと」、「いとほしきこと」、「心やましきこと」、「浅ましきこと」等の観点から論じるという整然とした構成をとっている。これらを通じての物語論のありかは、前稿に見た如くであるが、これとは別の観点からなる評言が、源氏物語評の前提に付されている。

など、『源氏』とてきはかりめでたきものに、この経(法華経

をさす)の文字の一偏一句おはせざるらむ。何事か、作り残し書き漏らしたること、一言も侍る。これのみなむ、第一の難とおぼゆる。(22頁)

さてこの『源氏』作り出でたることこそ、思へど思へど、この世一つならずめづらかに思ほゆれ。まことに、仏に申し請ひたりける験しるしにや、とこそおぼゆれ。それよりのちの物語は、思へばいとやすかりぬべきものなり。かれを才覚にて作らむに、『源氏』にまさりたらむことを作りいだす人ありなむ。わづかに『宇津保』『竹取』『住吉』などばかりを、物語とて見けむ心地にさばかりに作り出でけむ、凡夫のしわざともおぼえぬことなり。(23頁)

右において作者は、源氏物語は最高の作品であること、しかし難点は法華経の経文を書き込んでいない(歌に詠み込んでいない)こと、また源氏は仏に請うて生まれた作品であること、というのである。これらは、既に見た作者の物語評論の視点とは全くことなる、特異のものいであることは明らかであるし、また、物語狂

言綺語觀と結びつく評語であることも容易に察しがつく。無名草子成立頃の^⑧、建久年間前後の源語觀ともくらべて、位置づけておく必要がある。

二

仏教では、妄語(いつわり)、綺語(巧みに飾り実のない語)はいましめられているが、文学のいとなみはこの狂言綺語にあたるとして斥ける考えがある。白楽天の「我有本願、願以今生世俗文字之業、狂言綺語之誤、^⑨転為^⑩将来世世讚仏乘之因、転法輪之縁^⑪也」(白氏文集卷七十一)の句は、和漢朗詠集にも採られて広く流布するところとなり、中古中世の文学觀に大きな影響を与えてきた。この狂言綺語觀の展開は源氏物語に対する見方にも立ち入って^⑫くるところとなる。源氏物語は世に現われて以来、各方面から絶讚を博し、多くの愛好者を得たことは今さら説明の要はない。俊成の有名な判詞「源氏見ざる歌詠みは遺恨の事なり」(六百番歌^⑬倉)をうけて源氏物語は歌人必読の書となった。しかし一方で、仏教者流の狂言綺語觀にもとづく源氏觀も頭をもたげ、無名草子成立の頃—大まかに一二〇〇年前後—は、後者が最もはげしくもえさかった時代といふことができる。

源氏物語が中世において仏教的立場から受容されることが多かったことはいままでもないが、その著しい現象の一つとして、源氏供養があった。それは宝物集・今物語・藤原隆信朝臣集・新勅撰和歌集卷十(藤原宗家歌)等によってもうかがわれるが、

最も端的には、源氏一品経表白(注記省略)、物語風の表白(注記略)、源氏物語願文(注記略)等のいわゆる源氏物語表白類にみられる。

寺本直彦氏は右のごとく述べて詳しく考察しておられる(「源氏物語受容史論考」後編第三節源氏講式について)。源氏供養の由来については宝物集(治承年間一一七七一八の成立か)に、

マチカクハ紫式部カ夢ニ虚言ヲ以源氏物語ヲ造シ故ニ、地獄ニ墮テ苦ヲ受タリト見ヘシ故ニ、早源氏物語ヲ破リ捨テ、一日経ヲ書テ唱ヘシト云ケルトテ、歌説共集テ務ナシアヒタリシ也

とあるが、藤原隆信朝臣集に「は、の紫式部がれうに一品経せられしに、……」、又新勅撰集卷十の宗家の歌の詞書に「紫式部のためとて結縁供養し侍りける所に、……」とあるのも宝物集のいう「歌説共集子」と同じものではないかと同氏は後藤丹治氏の説を援用して推定される。更には、澄憲の源氏一品経表白も隆信母の催した源氏供養のときのものと考えておられる。因みに、隆信母は建久四年(一一九三)二月没、宗家は文治五年(一一八九)閏四月没、澄憲は建仁三年(一一〇三)八月没であり、ここにいう源氏供養は無名草子に先立つ、ほぼ同時代のことということになる。無名草子成立時にさしづく頃(延応元年一二三九後間まなくの成立か)の今物語にも、

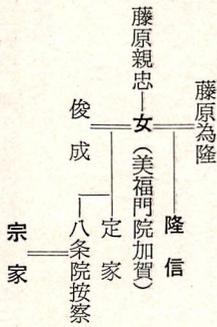
或人の夢に其正体もなきものかげのやうなるが見えけるをあれは何人ぞとたづねければ、紫式部也。そらごとをのみおほく

しあつめて人の心をまどはすゆへに地獄におちて苦をうくる事いとたへがたし。源氏のものかたりの名をぐして、なもあみだ仏といふ歌を巻毎に人々によませて吾くるしみを訪ひ給へといひければ、いかやうによむべきにかと尋けるに、

桐壺に迷はむ聞もはる計なもあみだ仏と常にいはなむ

とぞいひける。(群書類從)

と同様のことが見える。また、寺本氏は権中納言実材卿母集に「源氏のものかたりをあさ夕見侍りしころ、むらさきしきふを夢に見侍りて、かの菩薩のために、法花経供養せさせなとして、講をこなひ侍し時」とみえる「源氏講式」は文永九年(一二七〇)以降、永仁元年(一二九三)以前と考証されている。このように、源氏物語を虚言と見、罪と観じて供養をする源氏供養は、狂言綺語観を最も直接的に承けた仏教者流の源氏観ということができるし、無名草子はそうした潮流の最中に書かれたということになる。また、源氏供養にかかわった人々の関係は、



右のごとく考えられている(同書)から、無名草子作者を俊成卿女

とすれば、作者は極く近縁のうちに源氏供養を経験していたことになる。

三

源氏供養が最も仏教的な源氏物語観だとすれば、今鏡は同じような立場にありながらも源氏物語を罪とは見ず評価しようとする。成立は嘉応二年(一一七〇)と想定されているから、無名草子より前のほぼ同時代のものといえる。巻十は「打聞」で、この中に、「作り物語のゆくへ」の一項を立てて述べられているが、長きにわたるので、今必要のところのみ抄出する。

またありし人の、「誠にや、昔の人紫式部の作り給へる源氏の物語に、さのみかたもなき事のなよび艶なるを、もしは草かき集め給へるによりて、後の世の煙とのみ聞え給ふこそ、縁にえならぬつまなれども、あぢきなく弔ひ聞えまほしく」などいへば、(日本古典全書)

との問いかけから始まる。「後の世の煙」は後文に、「奈落の底に沈む」ともある。根拠のないなよやかで艶美な話しを書いたために、紫式部は地獄に墮ちているということだから弔いたいというのである。狂言綺語説による問いかけであるが、これに対して次のように反論する。

妄語などいふべきにはあらず、わが身になき事を、あり顔にげに〜といひて、人のわろきをよしと思はせなどするこそ、そらごとなどはいひて、罪得る事にはあれ。これはあらまじごと

などやいふべからむ。綺語とも雜穢語などはいふとも、さまざま深きにはあらずやあらむ。

源氏物語は「妄語」と評するのは当らない、そらごとではない。「綺語」ではあるが、それほど罪深いものではないというのである。物語を「妄語」「綺語」とする考えの大枠には添いながら、源氏物語の内実は「綺語」の軽いものだ程度で差で応じている。更に、

人の心をつけむ事は、功德とこそなるべけれ、情をかけ、艶ならむに因りては、輪廻の業とはなるとも、奈落に沈む程にやは侍らむ。

と、源氏物語は読者の心を動かす作品であるから、狂言綺語の罪も転じて功德になるといい、更には、譬喻経の例を引き合いに出して、これほどの作品を書いた紫式部は観音菩薩の化身ではないかと主張する。

仏も譬喻経などいひて、なき事を作り出し給ひて説き置き給へるはこと虚妄ならずとこそは侍れ。女の御身にてさばかりの事を作り給へるは、ただ人にはおはせぬやうも侍らむ、妙音観音など申すやむごとなき聖たちの女になり給ひて、法を説きてこそ人を導き給ふなれ。

源氏物語の狂言綺語は、仏法における譬喻経の場合と同じく、虚言しているということにはならないというのである。これを聞いた供の童が次のような疑問をさしはさむ。

これは男女の艶なることを、げに〜と書き集めて、人の心に

染めさせ、情をのみ尽くさむことは、いかがは貴き御法とも思ふべき。

源氏の中味は男女の艶なる話ではないか。そのような話で人の心を尽くさせたとしても、どうして貴き御法と思えようか、というのである。これに対する答えは、一つは、

誠にしかはあれど、事様のなべてならぬ、めでたきの余りに思ひ続け侍れば物語などいひて、一卷二巻の書にもあらず、六十帖などまで作り給へる書の、少しあだにかたはなる事もなくて、今も昔も、めで翫び、帝后より始めて、えならず書きもち給ひて、御宝物とし給ふなどするも、世に類なく、また罪深くおはすなど世に申し合へるにつけても、なか〜怪しく覚えてこそ申し侍りつれ。

大部の書であるにもかかわらず、未熟なところもないすばらしい作品で、今も昔も、帝后をはじめとする人々に賞翫され宝物となっている。このような現実を前にすると「罪深し」とする考えには合点がいけない、というのである。「罪深し」とする考えを論破することはできないが、源氏物語が比類のない優れた作品であるということを楽しめるの現実を表に出して述べようとしている。二つには、

罪深き様をも示して、人に仏の御名をも唱へさせ、弔ひ聞えむ人のために、導き給ふはしとなりぬべく、情ある心ばへを知らせて、うき世に沈まむをも、よき道に引き入れ、世のはかなき事を見せて、あしき道を出だして、仏の道に勉む方もなかるべ

きる。

四

無名草子作者は右のような源氏観のなかでどのような立場をとったか、一に引用した部分にもう一度たち返って見てみよう。

まずはじめに、「源氏」とてさばかりめでたきもの」とし、「まことに、仏に申し請ひたりける験にや、とこそおほゆれ」という。源氏物語は優れた作品であり、仏の加護を受けて生れた作品で仏道と対立する存在ではないという。今鏡と同じようでありながら、同じではない。今鏡は「綺語とも雑穢語などはいふとも、さまざま深き罪にはあらずやあらむ」と、深き罪ではなくとも、源氏が綺語・雑穢語にあたるという基本認識の上にある。しかし、無名草子では物語は綺語であり、罪であるという考えは記述の表面から消えて、ただ仏に請うた作品で、仏の道にはずれるものではないという。そして、物語綺語、罪という考えに代って出されたのは、法華経の一偈一句を詠みこんだところが、源氏物語の難点だといふのであった（前掲引用文）。綺語観の流れを引いて出てきた物言いであることは、その通りであるが、物語は罪ということでは姿を消している。正面きって論駁したというのではなく、法華経をよみこんでいないのが難点という形にすりかわっている。物語は罪かどうかの議論は素通りして、物語の中に経文があるかどうかの形式論に姿を変えてしまったのである。なぜ難点となるのかについては、

きにあらず。そのあり様を思ひ続け侍るに、あるは別れをいたみて優婆塞の戒を保ち、あるは女のいさぎよき道を守りていさめごとには違はず、この世を過しなどし給へるも、人の見習ふ心もあるべし。また帝の覚え限りなくて、えならぬ宿世おはすれども、夢幻の如くにてかくれ給へるなど、世のはかなき事を見む人、思ひ知りぬべし。また帝の位を棄てて、弟に譲り給ひて、西山のほらに住み給ふなども、仏の道に入り給ふ深き御法にも通ふ御あり様なり。提婆品に説き給へる、昔の帝の御あり様も思ひ出でられさせ給ふ。偏に男女の事のみや侍る。

源氏物語は「罪深き様をも示し」、「情ある心はへを知らせ」、「世のはかなき事をも見せて」、「仏の道に勧む方」もないわけではないとし、具体的に八宮、浮舟、源氏晩年の生活、朱雀院の出家等を挙げて「仏の道に入り給ふ深き御法にも通ふ」とする。「偏に男女の事」ばかりではない、仏の道に入るよすがを源氏物語は描いていると弁ずるのである。

このように、今鏡は基本的には狂言綺語観を承けながら、源氏物語の内容は、仏の道にはずれるものではないということと擁護するのであるから、源氏物語は罪ではない、すばらしい作品だと主張しているが、「物語は狂言綺語」の考え方から抜け出ているわけではない。仏教者流の考えの大枠のなかで、源氏物語を認知してこういう態度である。しかし、先の、源氏を罪とし供養を経てはじめて救われるという立場からすれば、大きく源氏側へ踏み出している。仏教者の論理の上での源氏擁護ということがで

功德の中に、何事をかおろかなると申す中に、思へど思へどもめでたくおほえさせ給ふは、法華經こそおほしませ。いかに面白くめでたき絵物語と言へど、二三遍も見つればうるさきものなるをこれは千部を千部ながら聞くたびにめづらしく、文字ごとにはじめて聞きつけたらむことのやうにおぼゆるこそ、淺ましくめでたけれ。「無二無三」と仰せられたるのみならず、「法華第一」とあめれば、事新しくかやうに申すべきにはあらぬど、さこそは昔より言ひ伝へたることも、必ずさしもおほえぬことも侍るを、これは、たまたま生れ合ひたる思ひ出に、ただ逢ひ奉りたるばかり、とこそ思ふに、など『源氏』とてさばかりめでたきものに、この經の文字の一偏一句おほせざるらむ。という。法華經を第一とし、絵物語を下位にみるところは綺語觀と同じではあるが、罪であるという考えは出されていない。これほどめでたき法華經がよみこまれていないから難だとするだけで、物語が綺語とも罪ともいわない。そこには立ち入らないまま、すばらしい法華經を物語の中によみこむべしという表面的な形がもち出されている。狂言綺語の論の形だけをうけて、法華經を免罪符にしてこの議論を通りすぎようとしているともいえる。法華經が入っているかいないかという提示であるから、これに続く議論は次のようになる。

あるが中に若き声にて

「紫式部が、法華經を読み奉らざりけるにや」と言ふなれば、「いさや。それにつけても、いと口惜しくこそあれ。あやしの

わが歌に、のちの世のためはさるものにて、人のうち聞かむも情おくれておほえぬべきわざなれば、あながちにしても見奉らまほしくこそあるに、さばかりなりけむ人、いかでかさることあらむ」などいへば、また、「さるは、いみじく道心あり、後世の恐れを思ひて朝夕行ひをのみしつ。なべて世には心もたらぬさまなりける人にや、とこそ見えたれ」など言いはじめて。

源氏物語に法華經をよみこんでいないということは、紫式部が法華經を読んでいないのたろうかと若い女房が尋ね、そんなはずはない、「さばかりなりけむ人、いかでかさることあらむ」といい、またある人は、紫式部は「いみじく道心あり」という。物語が罪であるかどうかの論はとび越えたまま、法華經の有無に形をかえてしまふ。後文(紫式部を評した条)には、

歌をも詠み詩をも作りて、名をも書き置きたるこそ、百年千年を経て見れども、只今その主にさし向ひたる心地して、いみじくあはれなるものはあれ。されば、ただ一言葉にても、末の世にとどまるばかりのふしを書きとどむべき、とはおぼゆる。とある。狂言綺語觀にかかわりのある前述のところでは述べられることはなかったが、ここにおいては後世に残るような作品を書きたいという。綺語意識などは全く見られない。むしろ、逆の立場にあるといえるのである。

無名草子は源氏物語のすばらしさを認めることを基本にして、當時盛行の狂言綺語觀を法華經文を欠くという難点(罪ではない)に

とどめ、文学として源氏を批評してゆくところへと筆をすすめていくのである。それは、物語綺語説を正面から駁したものでなかったが、消極的な形で封じ込めつつ、源氏を罪とせず文学者流に受けとめ、批評をすすめていったといえる。源氏供養を仏教者流に最も近いものとすれば、今鏡は同じ土俵の中で源氏を認めよう、擁護しようとするものであったし、無名草子は綺語観を表面のうちにすこして、最も源氏寄りに立つものであった。これ以後

の源氏愛好家や注釈者は無名草子の立場を承けていったと思われる。源氏物語の最初の本格的注釈であり、以後の研究の柱となった『河海抄』は巻頭に無名草子のこの論をほぼそのままに展開している。物語論として、仏教家の狂言綺語説に対抗する文学論はなしえなかったが、源氏を罪とする考えには抗してこれをしのぎながら、源氏を文学の立場で享受していく方法、その礎となったのが無名草子であると考えるのである。

注① 和田繁二郎博士
古稀記念

日本文学伝統と近代 所収論文「無名草子の物語

評

② 本文の引用は、新潮日本古典集成『無名草子』による。

③ 無名草子の成立年は、文中に建久七年（一一九二）の語が見えるので、それより数年後の成立であるが、建久七年以後建仁二年（一一二〇）以前（山岸徳平氏説）、建久七年以後九年（一一九八）以前（石田吉貞氏説）、正治二年（一一二〇）以後建仁元年（一一二〇）以前（樋口芳麻呂氏説）等がある。

④ 「文芸第一義諦を演ず一狂言綺語即仏道一」菊地良一氏『仏教文

学研究』昭和47年、「観学会一狂言綺語観の展開(1)一」中川徳之助氏『国文学攷』昭和30年等。

（ばん・としあき 本学教授）